

普段寺古墳群 I

第1～3次調査概要報告書



2008

普段寺古墳群調査団

島根大学法文学部考古学研究室・鳥取大学地域学部考古学研究室

目次

序	(1)
I 調査の経緯と目的	(2)
II 周辺の地理的・歴史的環境	(3)
III 測量調査(第1・2次調査)の成果	(4)
IV 発掘調査(第3次調査)の概要	(6)
V 墳丘形態の復元	(10)
VI 出土遺物	(11)
VII 総括	(12)

例言

- 本書は、鳥取県西伯郡南部町(旧会見町)大乃字下普段寺山に所在する普段寺古墳群に関する調査(第1～3次調査)の概要報告書である。調査は、鳥根大学法文学部考古学研究室と鳥取大学地域学部考古学研究室が合同調査団を組織して実施した。第1次調査として2006年8月18日～9月1日、第2次調査として2007年3月27日～4月2日に古墳群の測量調査をおこなった。さらに、第3次調査として2007年8月17日～9月3日に墳丘形態、規模の確認を目的とした発掘調査をおこなった。
- 本書の編集は、渡辺貞幸監督の下、大橋泰夫・山田康弘・高田健一がおこなった。遺物・図面整理、執筆・作図は、鳥取大学・島根大学の教員とともに、有田武司、井田 智、福代圭佑、正木伸男(鳥取大学学生)、田中 大、林田好子(島根大学学生)が中心になっておこなった。執筆分担は本文末尾に記す。
- 本書は、平成18・19年度鳥根大学フィールド学習教育プログラムおよび平成19年度法文学部長裁量経費による成果である。また、報告書の作成に当たっては、鳥取大学平成19年度教育・研究改善推進費(学長裁量経費)の一部を充てた。
- 調査期間中、下記の方々、機関に大変お世話になった。感謝申し上げる。
潮 晴美、曹潤宗大(松尾昭倫)、山下 晃、岡田善治、岡田龍平、岡田昭明、下高瑞成、佐伯純也、中原 斉、中森 祥、酒 隆造、下江健太、河合章行、坂本嘉和、高橋章二、中川 寧、平川 誠、加川 崇、田中正俊、松木武彦、魚津知克、東方仁史、梶原義実、会下和弘、花谷 裕、南部町総合福祉センターいこい荘、鳥取大学生活協同組合、南部町教育委員会(順不同、敬称略)
また、本書の作成に当たっては、米子市教育委員会、東森市良、杉本良己の各氏から有益な資料提供、ご教示をいただいた。感謝申し上げます。
- 現地調査参加者は以下のとおりである。
第1次調査:渡辺貞幸、大橋泰夫、山田康弘、岡崎山希、志賀明日香、瀧川裕子、原 浩平、三井 修、大橋賢太郎、田中 大、林田好子、宇積香奈(島根大学)、高田健一、濱田真由美、有田武司、川崎格、西村直子(鳥取大学)
第2次調査:渡辺貞幸、大橋泰夫、山田康弘、岡崎山希、志賀明日香、瀧川裕子、原 浩平、三井 修、田中 大、林田好子、坪倉宇吉(島根大学)、高田健一、有田武司、尾上英孝、川崎 格、樋口剣四郎、藤田 学、正木伸男(鳥取大学)
第3次調査:渡辺貞幸、大橋泰夫、山田康弘、田中 大、林田好子、坪倉宇吉、森藤徳子(島根大学)、高田健一、有田武司、尾上英孝、川崎 格、福代圭佑、正木伸男(鳥取大学)
- 標高は東京湾平均海面高度(T.P.)を基準とし、図中方位は座標北(G.N.)あるいは磁北(M.N.)を示す。なお、座標の数値は平面向角座標系V系(世界測地系)による。
- 上色の記載方法は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準上色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修/日本色彩研究所色標監修)2005年版にしたがった。

序

島根大学の考古学研究室は1981年に設置され既に多くの調査研究を展開しているが、2005年4月に、鳥取大学にも待ち望まれていた考古学研究室が開設された。同年度早々に、両者は協力して発掘調査を行うことで合意し、翌年から伯耆西部の普段寺古墳群の調査を開始した。このような二大学合同の調査団による継続的共同調査は、考古学の調査としては恐らく全国にもほとんど例のない画期的な企てであろうと自負する。

荒神谷遺跡の発見以来、山陰地方では考古学上の大きな発見・調査が相次ぎ、全国の研究者や考古学ファンの耳目を聳動させてきたが、こうしたなかで、山陰の二国立大学法人の研究室が団結して地域課題の解明に乗り出した意義は大きい。

調査はまだ始まったばかりであり、両大学のスタッフと学生は意気高く発掘調査に取り組んでいる。毎回、地元の方々の厚意溢れるご支援を受けているが、別けても、宿舎を提供していただいている潮 晴美さん、様々な局面で援助の手を差し伸べられた岡田善治さんに、深甚の謝意を表するものである。

2008年3月25日

普段寺古墳群調査団

団長 渡辺 貞 幸



図1 普段寺古墳群位置図

I 調査の経緯と目的

既往の調査と研究史 普段寺古墳群の考古学的な認識は1921年に遡る。農業用溜池の造成工事に伴って2号墳が破壊され、三角縁珠文帯四神四獣鏡が出土したのである。このことは、当時鳥取県史蹟名勝天然記念物調査委員であった梅原木治に伝えられ、六朝以前の中間鏡として報告された(梅原 1924)。出土状況の聞き取りによって埋葬施設は木棺直葬と推定されたが、鏡と近接して得られた「陶質容器片若干」がいかなるものか言及はない。また、1号墳西側くびれ部から土器棺が出土しているが、現状は行方不明である。

1952年に中学生2名によって1号墳の埋葬施設が掘削され、三角縁唐草文帯二神二獣鏡、管玉、鉄剣片等が掘り出された。佐々木謙の聞き取りによると¹⁾、中学生は「昭和27年6月頃」に「後円部を深掘して三角縁神獣鏡を発見した。2尺位の発掘で鉄剣の破片もでてきた」という。「鏡の上に炭がでた」上に、「土の色も黒みがかって変っていたし、石ころがたくさんでた」というから、2号墳とは異なって木棺とともに石材を使用する埋葬施設だった可能性がある。ただし、現状では墳頂部周辺にいったい石材は見られない。

この証言を受けて、佐々木古代文化研究室が1956年8月に墳頂部を発掘した。調査内容の詳細は不明であるが、当時のメモや写真等から推測すると、後方部北東隅で土器棺を検出するとともに、盗掘坑が調査されて既出の鉄剣に接合する切先片が出土したようだ。

墳頂部の土器棺は、先の中学生からの聞き取りの際、地表下5cmほどの浅い部分にあったため、あらかじめ存在が確認されていたものらしい。副葬品などは存在しなかったというが、現場図面は残されておらず、出土状態などの詳細も不明な点が多い。

1号墳出土の三角縁神獣鏡は、佐々木の仲介によって、樋口隆康が資料紹介することになり、同型鏡の確認やその歴史の意義が論じられた(樋口 1953)。1号墳の同型鏡には、島根県安来市大成古墳、伝大阪府東大阪市石切神社古墳、推定大阪府淡木市將軍山古墳出土鏡の3面が知られており、2号墳の同型鏡

には、熊本県宇上市城ノ越古墳出土鏡がある。

三角縁神獣鏡の研究が進展し、前期古墳の編年が整備される中で、山陰における前期古墳の代表例として普段寺古墳群が注意されるようになる。基礎的な情報整理が求められたと考えられる。墳丘測量を試みた例としては、山陰考古学研究所、岡田龍平、東森市良・松本哲らによる成果がある。残念ながらそれらがリアルタイムに公開される機会はすくなく、調査対象が古墳群全体に及ぶことはなかったが、1970年代末までには前方後方墳ではなく、前方後方墳との認識に改まった²⁾。

1号墳を前方後方墳とする認識は定着したが、2号墳以下については、不明な点が多すぎる。山陰における古墳の出現やその地域の展開を論ずる際、常に言及の対象となる古墳群であるが、その全体像は第三者に明らか形で提示されたことがないのが現状と言えよう。(高田)

調査の課題と目的 上述のとおり、普段寺古墳群は地域の古墳時代史において重要な位置を占めるにもかかわらず、その実像は詳しく検討されたことがない。既存の測量図が作成されてから数十年を経ていることから、まず基礎的な測量図が改めて必要な段階であると考えられた。そのため、すくなくとも同一尾根上に連続して存在する5基の古墳群³⁾を図化することが調査の第1段階として求められた。後述するとおり、2次にわたる測量調査によって、5基の古墳群が立地する地形と共に図化することができた。

第2段階の調査課題としては、墳丘形態や規模に関する基礎的な情報収集が挙げられる。従来から20数mの前方後方墳と見られている1号墳は、近世の築地造成によって前方部が切断されているため、正確な規模は不明である。方墳とされる2号墳についても、必ずしも方墳と断定できるわけではない。2号墳については、今回報告する調査では実現しなかったが、これらの課題解決には発掘調査が必要であり、第3次調査として着手した。

課題解決に向けた調査は始まったばかりであるが、基礎的な調査の積み上げが今後も必要であろう。(高田)

II 周辺の地理的・歴史的環境

普段寺古墳群が所在する地域は、南に中国山地が連なっており、そこから発する日野川などの河川によって東西に分断されている。南部町域内では南側には鎌倉山(730.7m)があり、そこから法勝寺丘陵性山地沿いに法勝寺川が北流し、沖積低地として形成された法勝寺平野が広がる。また、東側には越敷山丘陵性山地沿いに小松谷川が流れており、その流域に小松谷盆地が形成される(図2)。

普段寺古墳群は、法勝寺丘陵性山地の一つである峰山(192.7m)から舌状に北へ伸びる支丘陵の尾根上に立地する(1)。その尾根は水田からの比高が約10mで、法勝寺平野を望むことができる。同様に、周辺の古墳も平野を望む丘陵や尾根上に立地する特徴をもつ。

次に、普段寺古墳群周辺の歴史的環境を理

解するため、古墳時代前期を中心として弥生時代から平安時代までの周辺遺跡をみていく。

弥生時代前期には諸木遺跡(14)、天工原遺跡(28)、清水谷遺跡(20)で環濠をもつ集落が形成される。中期になると青木遺跡(4)、浅井土居敷遺跡(27)、宮尾遺跡(16)、越敷山遺跡群(30)など多くの集落が営まれるようになり、山間部にまで居住地域が拡大する。後期にはさらに台地や丘陵上で居住地域が広がり、長者原台地では青木遺跡で集落が拡大するとともに新たに福市遺跡(3)が形成される。同時期の朝金小千代遺跡(32)では墳丘墓が築造される。

古墳時代前期の集落は、弥生時代から引き続いて断続的に営まれていることが多く、中でも天方土井前遺跡(18)は普段寺古墳群から北に約500mと近接しており、畿内系の庄内式壘も出土していることから普段寺1、2

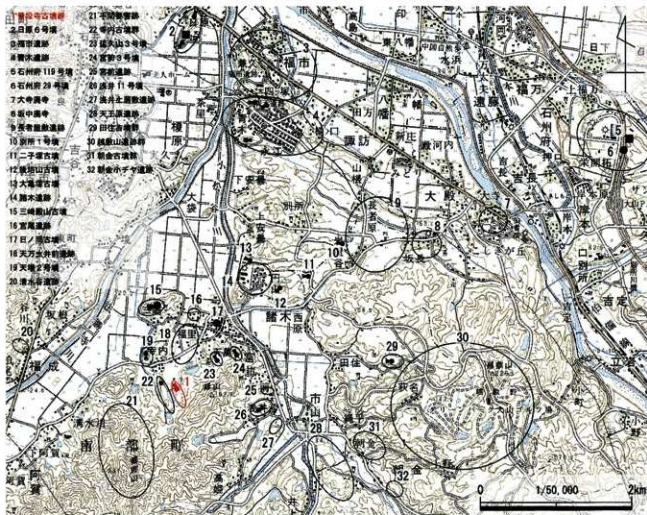


図2 周辺のおもな遺跡分布図

号墳との関連が目される。

前期の古墳は、一辺21mの方墳である日原6号墳(2)が最古で、普段寺1、2号墳がこれに続く。他の前期古墳には、石州府29号墳(6)や石州府119号墳(5)など10mほどの円墳や方墳がある。中期には全長108mの前方後円墳で西伯耆最大の規模を誇る三崎殿山古墳(15)が、普段寺1号墳北側の独立丘陵上に築かれる。峰山を挟んだ小松谷川中流では、全長45mの前方後円墳で画文帯神獸鏡を出土した浅井11号墳(26)が存在する。後期になると、長者原台地西側に全長55mの後塔山古墳(12)や全長53mの大亀塚古墳(13)などの前方後円墳が築造され始める一方で、越敷山丘陵性山地には、田住古墳群(29)、朝金古墳群(31)など群集墳が形成される。古墳時代を通して、この地域の有力古墳は特定の丘陵上に集中せず、各地に点在する特徴をもつ。

奈良・平安時代には、長者原台地の東側に古代寺院である大寺庵寺(7)や坂中庵寺(8)、会見郡衙の可能性のある長者屋敷遺跡(9)などがみられ、付近に古代山陰道も推定されている。同じ長者原台地に後期的大型古墳を築造した有力豪族が、後に寺院を建立する勢力となったと考えられる。

このように、普段寺古墳群周辺の地域は弥生時代から平安時代にかけて、西伯耆地域における重要な拠点であったと言える。その一方で、この地域は鳥取県下において前方後円墳・方墳が集中する地域であるものの、詳細な調査・研究がほとんどされておらず、今後の検討課題は多い。(田中・林田)

III 測量調査(第1・2次調査)の成果

2006年度に2次にわたる測量調査を実施した。従来の測量図は、いずれも周辺地形が十分に図化されておらず、墳頂部最高点を基準にした等高線で表現されているため、古墳群の立地や高さが不明であった。さらに、3号墳以南に存在する小規模古墳は割愛されており、古墳群全体を見る視念に欠けている。これらの点を改善するため、既知の水準点から復水準測量をおこなうとともに、可能な

限り古墳群の周辺地形も図化した(図3)。等高線間隔は25cm、原図は1/100である。

古墳群は、尾根上平坦部の幅が約20mの北西に延びる丘陵上に立地している。標高はおおむね51m~52mである。ため池造成工事によって尾根幅が減じているが、残存している周辺の自然地形から判断しても、岬状に突出する細長い丘陵上に立地していることは間違いない。このような地形が古墳の規模や築造方法に大きく影響していると言えよう。

1号墳は尾根上平坦部の先端に立地し、前方部を北西に向ける。後方部東側及び南側で等高線が直線的であり、標高51.75m、52.00mの等高線に屈曲をなす部分が観察できることから、やはり前方後方墳であると判断できる。前方部は、近世の墓地造成のために削平されており、現状で10mほどの長さしか残存していないが、墓地の北側一帯に存在する段状地形が前方部前端を示す可能性が考えられた。一方、後方部は西側が削り取られて急な崖となっているが、東側の墳丘形態はおおむね良好に保存されていると考えられた。ただし墳頂部は西側に傾斜する斜面となっていたため、削平を受けていると予想される。1956年に調査された土器館出土位置と思われる場所は窪みとなって残っている。

2号墳は従来方墳と考えられてきたものだが、今回の測量調査の結果、確実に方墳とすべき根拠は見られなかった。1号墳との間に周溝が存在すると考えられ、東西に直線的に伸びる溝が観察されるが、それ以外の部分に直線的な等高線は見られない。むしろ、墳丘の保存状態が良い東側から南側にかけての部分は円墳と考えるにふさわしいあり方を示す。墳丘は古墳群中最も高く現状で約5mに達し、直径は22~23m程度になると思われる。

3号墳以南は、一転して高さ1m程度の低墳丘になる。いずれも削平や盗掘を受けているために墳丘形態は明らかでないが、3号墳は東西15m、南北10mほどの方墳、4号墳は一辺あるいは直径10mほどの方墳ないしは円墳、5号墳は南北15m、東西10mほどの方墳あるいは楕円形墳と考えられる。いずれも石材等は見られないから、葺石や貼石等の外表施設はないと考えられる。(高田)

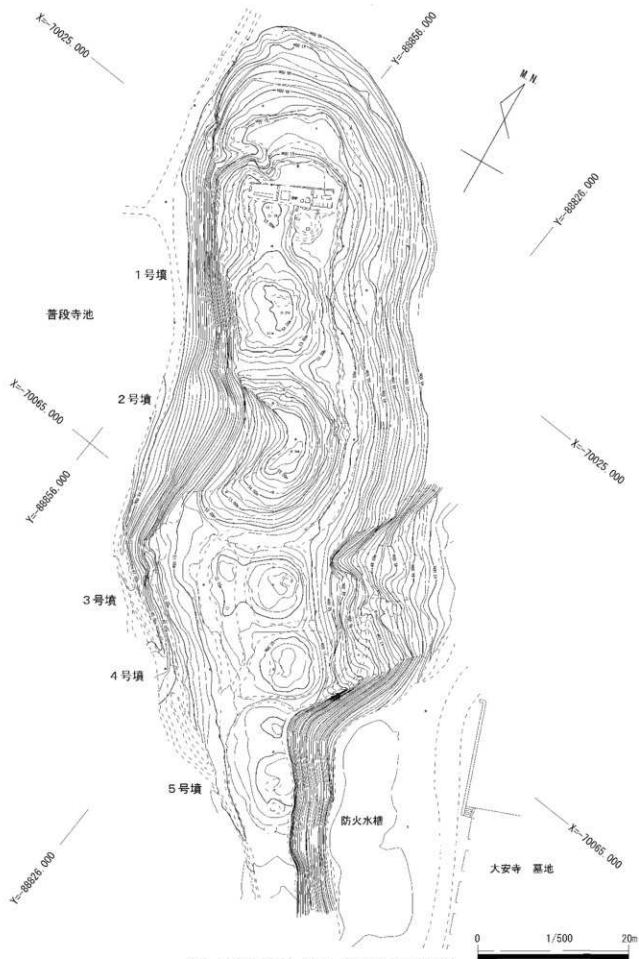


图3 普段寺古坟群（1号~5号填）地形测量图

IV 発掘調査（第3次調査）の概要

調査区の設定（図4）

1号墳に関して、前方部の形状や規模等を確認するために5箇所（第1～第5トレンチ）、くびれ部の確認のために1箇所（第6トレンチ）、後方部の形状や築造方法、あるいは2号墳との関係を明らかにするために2箇所（第7、第8トレンチ）、合計8箇所にトレンチを設けた。トレンチは基本的に幅1mとしたが、くびれ部に関しては3m×3mの正方形とし、面的に把握することを指した。また、墓地所有者の了解を得て前方部掘削断面の清掃をおこない、前方部盛土の有無を把握した。一部確実な地山面まで掘削をおこなったので、これを第5トレンチとした。（高田）

第1トレンチ

前方部西側の墳端を確認する目的で、長さ3.2m、幅1mのトレンチを設定した。表土を除去した段階で調査を終了した。確実な墳丘面の確認に至っていないため、今後追究する必要がある。

トレンチの中央部で土器片が1点出土し

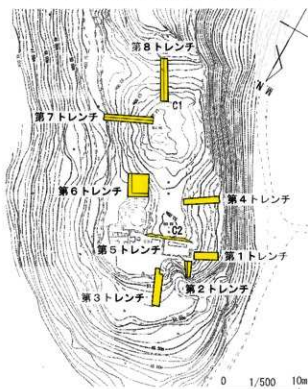


図4 トレンチ配置図

た。これは大きさ9×10cmで厚さ約2cmの土器片で、これまでに見つかった土器と関連すると考えられる。（有山）

第2トレンチ（図5）

前方部前端を明らかにすることを目的として、長さ2.6m、幅0.6～1mのトレンチを設定した。

表土除去後、黄褐色の土層が見られ、当初この層を墳丘面と考えたが、断り割りの結果、土層が黒く汚れ、しまりもないことから墳丘の盛土が流出した流土であると判断した。

トレンチ南側では表土掘削時から大きな角礫がみられ、葎石が存在する可能性が考えられた。断り割り調査によって、地山直上に26×22cmほどの角礫が掘えられていることを確認した。右の平坦な面を北側に向けて2石以上配列していることから、葎石の基底石と考えられた。しかし、石が掘えられた面は水平ではなく、石列の北側ラインも現状の墳丘中軸に直交していない。そのため、現段階では確実に葎石であると判断できない。なお、この右列の基底部の標高は51.4mである。

石列から北側にかけて階段状に加工された段が検出された。これらの段は上述の石列に平行しており、これが墳丘の築造に伴って加工された段である可能性も考えられた。しかし、石列と同様に現状の墳丘中軸に直交しないこと、地山直上の土層がかく乱層であることから考えると、古墳に伴うものではないと考えられる。（福代）

第3トレンチ（図6）

前方部前端を明らかにするため、前方部北側斜面上に長さ4.9m、幅1mのトレンチを設定した。この位置に設定したのは、前方部が後世の墓地造成によって削平され不明であるものの、北側斜面の標高51.8～50.9mに存在する段が前方部前端に関連すると考えたためである。

調査の結果、北側斜面から地山を階段状に加工した段と花こう岩礫を含み東西0.4×南北0.3mのやや楕円形の土坑を検出した。階段状に加工した段は、地山直上から近世以降と考えられる灯明皿1点が出土しており、近



図5 第2トレンチ（北から）

世以降に造成された削平面で古墳に伴うものではない。また、土坑の時期は不明である。したがって、本来の前方部前端は確認できていない。（林田）

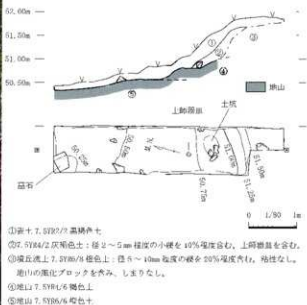
第4トレンチ

前方部西側墳端を明らかにするため、西側くびれ部より長さ4.7m、幅1mのトレンチを設定した。今回は表土を剥いただけであり、前方部西側墳端は確認できなかった。（林田）

第5トレンチ（図7）

前方部の墳丘構築方法を明らかにするため、近世以降の墓地造成による前方部掘削断面の精査をおこなった。

調査の結果、表土上下は花こう岩の風化した地山となっており、前方部は地山を削り出しして整形していることが明らかとなった。ただし、第2、6トレンチでは墳丘の盛土が流出したとみられる黄橙色土を確認しており、本来前方部には盛土が存在した可能性がある。また、花こう岩礫を含む土坑を墳丘中軸上及び東墳端付近の2ヶ所で確認した。前者は、幅0.7m、深さ0.4m、後者は幅0.4m、深さ0.2mの規模である。現段階では古墳に伴うものか、後世のかく乱によるものか



- ①黄十 7.5YR5/7 黄褐色土
 ②7.5YR4/2 灰棕色土：径2～5mm程度の小礫を10%程度含む、上層部礫を含む。
 ③黄褐色土 7.5YR6/6 褐色土：径5～10mm程度の礫を20%程度含む、粘性なし。
 ④地口 7.5YR6/6 褐色土
 ⑤地山 7.5YR6/6 褐色土

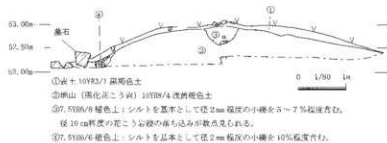
図6 第3トレンチ平面図・断面図

不明である。（田中）

第6トレンチ（図8）

くびれ部の形状を確認するため、3m×3mのトレンチを設けた。表土を除去し、盛土と考えられる黄橙色上の面を確認したところで掘削を止めた（図8左）。黄橙色土層は前方部～後方部にかけて存在し、トレンチ中央部よりやや西側の部分において傾斜が変わる。前方部と後方部において傾斜変換点を結んだ線がほぼ直交することから、前方後墳であることを改めて確認した。

トレンチの東側と北側でそれぞれ幅0.5mの断ち割り調査をおこなったところ、くびれ部の形状に沿う形で地山をほぼ垂直に加工した段が見られた（図8右）。段は2段にわたって施されており、上段の平坦面は墳丘盛土から連続している。下段上面は幅20～40cmほどの犬走り状の平坦面をなす。調査区内で2段



- ①黄十 10YR3/7 黄褐色土
 ②地山（風化した花こう岩） 10YR8/4 淡黄褐色土
 ③7.5YR6/6 褐色土：シルトを基本として径2mm程度の小礫を5～7%程度含む。
 径10cm程度の花こう岩の片が散見される。
 ④7.5YR6/6 褐色土：シルトを基本として径2mm程度の小礫を10%程度含む。
 径5～10cm程度の花こう岩の片が散見される。

図7 第5トレンチ土層断面図



図8 第6トレンチ全景とくびれ部の加工段（北から）



図9 第7トレンチ墳頂部盛土と地山の加工段（南東から）

口の下端は検出できなかったが、ピンボールによって地山と考えられる面の標高を確認したところ、50.634mであった。これが墳頂の標高を示すとすれば、本来の墳丘裾部が現地地表から1m以上埋没していることになる。墳丘規模も現状から大きく修正する必要がある。ただし、ここで検出したくびれ部の加工段はほぼ垂直な面であり、くびれ部の形状としては異質である。近世墓の墓壇やくびれ部に設けられた未知の埋葬施設である可能性も考慮したが、埋土が墳丘流土と考える土層と同質であり、一連の堆積と考えること、ブロック状の粒子が含まれるなど人為的な堆積とする確実な証拠がないことからすると、くびれ部の可能性が高いと考えている。詳細は次回以降の調査課題としたい。

なお、トレンチ内の墳丘流土と考える層から3点の土師断片が出土した。（正木）

第7トレンチ（図9）

後方部における東側墳頂を確認するため、長さ6.7m、幅1mのトレンチを設けた。ほぼ全体に墳丘面と考える明赤褐色土層を確認したが、墳頂部周辺ではやや土質の異なる橙色土層が覆っていた。墳頂部には異なる十色の盛土がおこなわれた可能性がある。

トレンチ北側で幅0.5mの断ち割り調査をおこなったところ、墳丘斜面部では地山に3段の加工段があり、その段を埋め戻すように盛土がおこなわれている様子が観察できた。各加工段の上面に沿って地山の花こう岩ブロックが敷きならされたように堆積している。これは下方から地山を崩しつつ盛土をおこなって墳丘を構築していった過程が考えられる。標高53.00mあたりで地山は平坦に加工され、墳丘上半部となる盛土がおこなわれている。この部分の盛土は、風化によって著しく細粒

化し、赤色化した土層や炭化物を多く含む上層が水平に盛られており、墳丘斜面部の盛土とは性格が異なる。炭化物を多く含む土層は墳丘中心部近くに用いられていることから、埋葬施設の構築面などに関わる可能性がある。

墳端部は地山の削り出しによって形成され、地山の傾斜変換点を墳端と判断した。

なお、遺物は出土しなかった。(正木)

第8トレンチ(図10)

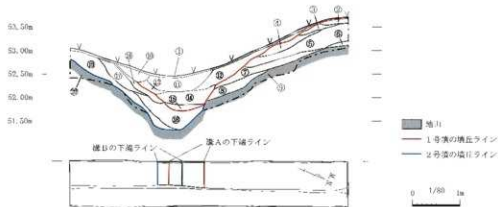
1号墳後方部の南側墳端、2号墳の北側墳端、両古墳の新旧関係・墳丘構築方法を明らかにするため、1号墳主軸上で両古墳の間に長さ5.9m、幅1mのトレンチを設定し、西側を0.6mの幅で断ち割った。

調査の結果、1号墳の残存墳丘面に伴う溝A(赤線部)と2号墳に伴う溝B(青線部)を確認した。溝Aは溝Bの埋上を掘り込んでいることから、1号墳が2号墳よりも新しい。両溝の埋土は、流土による自然堆積と考えられる。1号墳墳端は溝Bの埋土中にあり、標高51.8mである。

墳丘構築方法は、1号墳側では地山を削り出した後に盛土をおこなっていることが判明した。第7トレンチで観察されたような階段状の加工段はみられなかったが、断ち割り部の北端で地山面が水平になる部分を検出した。この面の標高は53.1mで、第7トレンチ上半部において地山が水平になる部分の標高とほぼ一致する。また、この平坦面部を覆う墳丘盛土層(図10の⑤層)は、第7トレンチ上半部の墳丘盛土層と土質や層厚が良く類似している。墳丘上半部の盛土方法は、墳丘斜面部と異なって、水平面を作りながら構築していったと考えられよう。

一方、2号墳では花こう岩の地山を削り出して整形している。調査した範囲では盛土と判断できる土層は確認していないが、墳丘上半部は盛土によって構築したものと考えられる。

なお、このトレンチから遺物は出土しなかった。(田中)



盛土

- ① 7.5YR2/2 黒褐色土
- 1号墳墳丘頂上
- ② 10YR5/8 黄褐色シルト：径1mm程度の小礫を少量含む。
- ③ 7.5YR5/6 明褐色シルト：径1～2mm程度の小礫を少量含む。
- ④ 7.5YR1/6 褐色シルト：径1mm程度の15%程度を少量含む。
- ⑤ 7.5YR5/8 明褐色シルト：径2mm程度の小礫を少量含む。
- ⑥ 5YR5/8 明赤褐色シルト：径2mm程度の小礫を10%程度含む。
- ⑦ 7.5YR4/6 赤色シルト：径1～2mm程度の小礫を少量含む。
- ⑧ 5YR5/8 明赤褐色シルト。
- 地山風化層
- ⑨ 5YR5/8～7.5YR5/8 明赤褐色を呈する。
- 埋土
- ⑩ 5YR5/8 明赤褐色シルト：径1mm程度の小礫を5%程度含む。粘性あり。

1号墳周成層

- ⑪ 7.5YR4/6 褐色シルト：径1mm程度の小礫を10%程度含む。粘性あり。
- ⑫ 7.5YR4/6 褐色シルト：径2mm程度の小礫を10%程度含む。粘性なし。
- ⑬ 5YR5/8 明赤褐色シルト：径2mm程度の小礫を10%程度含む。粘性あり。
- ⑭ 7.5YR4/6 明褐色シルト：径2mm程度の小礫を5%程度含む。粘性あり。
- ⑮ 5YR4/6 赤褐色シルト：径1～2mm程度の小礫を少量含む。粘性あり。
- 2号墳周成層
- ⑯ 5YR5/8 明赤褐色シルト：径1mm程度の小礫を少量含む。粘性あり。
- ⑰ 5YR5/8 明赤褐色シルト：径1～2mm程度の小礫を少量含む。粘性あり。
- ⑱ 5YR5/8 明赤褐色シルト：径1～2mm程度の小礫を10%程度含む。粘性あり。
- ⑲ 5YR4/6 明赤褐色シルト：径1～3mm程度の風化花こう岩ブロックを含む。粘性あり。
- 地山(2号墳側)
- ⑳ 10YR6/8 明赤褐色の風化花こう岩ベースに10YR4/6 赤色土が上部に流入。マンガンが豊富に富み見られる。

図10 第8トレンチ平面図・断面図

V 墳丘形態の復元

調査が完了していない現状で墳丘形態を復元することには問題も多いが、今後の調査課題を明確にするため、現段階で判明する墳丘形態、規模について考えたい。

第7、8トレンチより後方部東側と南側の墳端、第6トレンチよりくびれ部の墳端と後方部が方形であることを確認した。したがって、前方後方墳であることが確定となった。

確認できた墳端線を延長することで後方部東側の規模を知ることができる。そして、古墳中軸線(C1-C2を結ぶライン)で折り返すことで後方部の規模を求めると、後方部は一辺が東西15.4m、南北15.2m、くびれ部幅

9.4mとなる(図11)。

検出したくびれ部は2段に加工されていた。少なくとも後方部北側から前方部にかけては、2段築成となっていた可能性がある。

今回の調査では前方部前縁が確認できなかったため、全長は分からない。しかし、この古墳が丘陵の先端部に立地し、後方部から前方部にかけて墳端の標高が低くなっている点を考慮すると、前方部前縁はくびれ部墳端よりも低い位置になるはずである。第3トレンチの北側にある段状地形の裾を仮に前縁とすると、前縁部の高さとして適当な位置となり、前方部の長さも後方部の規模とつり合うものになる。その場合、全長は約32mとなる。その解明は今後の課題である。(福代)

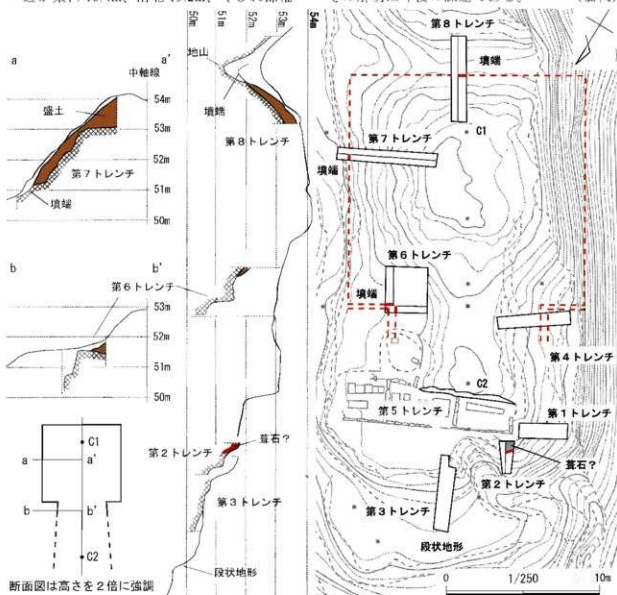


図11 墳丘形態復元図

VI 出土遺物

遺物は、土師器9点が出土した(図12)。4点は第3トレンチから出土した近世以降と考えられる灯明皿で(2)、古墳に伴わない。

1は、第1トレンチから出土した大形土師器片である。器壁の厚さ2.2cmを測る。法量や外面の調整法からみて、これまでに出土している土器棺と関連する可能性が高い。

第6トレンチから3点の土師器片が出土した。3は貼付突帯や竹管押圧凹形浮文のある小破片である。本来の大きさや器種は不明であるが、竹管文の押圧方向から考えて、図のような上下関係になると考えられる。下端部は破損しているが、口縁部にごく近い位置と考えられ、何らかの土製の蓋と推測する。外面はミガキの痕跡が残り、内面は細かいケズリが施される。胎土が精良で、一部に赤色顔料が付着していることも考え合わせると、供献用の精製土器と考えうる。

4は脚部内面に別作りの底部を接合した土器である。接合部が密着していないため、断面から接合方法がよく観察できる。外面と脚端部には貼付突帯が各1条あり、突帯間はヨコハゲが施される。復元径24.0cmを測る。形状から判断して、円形あるいは楕円形合子の可能性がある。

5は第1次調査時にくびれ部付近で表探した土器片である。口縁端面を広く拡張するため、1次的な口縁の下部に充填粘土を厚く貼り付ける。さらに端面を覆う粘土が貼り付けてあったと考えられるが、それは剝離して失われている。外面は細かいハケ調整、内面はナデと思われる。壺あるいは器台の口縁部の可能性がある。

6はわずかに湾曲を示す板状の破片で、器表面が著しく風化している。破片の長辺側に粘土継ぎ目が観察でき、幅6cmほどの粘土板を積み上げたものと考えられる。土器棺等の大形土器の破片と思われる。(高田)

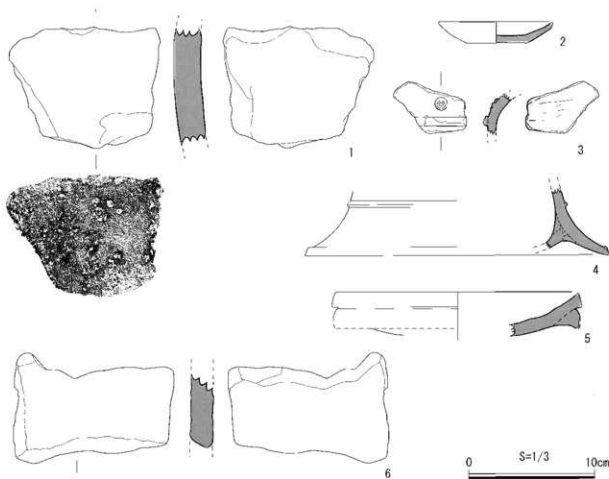


図12 出土遺物実測図

Ⅶ 総括

これまでの調査成果と今後の課題をまとめておきたい。

2次におわたる測量調査の結果、1、2号墳を含む5基の古墳群がその立地とともに図化できた。1号墳は前方後方墳と考えられるが、2号墳は従来考えられていた方墳ではなく、径22~23m程度の円墳となる可能性もある。

3~5号墳はいずれも低墳丘の方墳ないしは円墳と考えられ、1、2号墳とは大きく異なるあり方を示す。これらは築造時期が不明であるが、第3次調査の結果2号墳が1号墳に先行することが明らかになり、単純に丘陵先端から順次築造されたと考えられることはできない。2号墳よりも先行する古墳時代初頭以前の墳墓という可能性も念頭に置いて今後調査にあたる必要もあろう。

発掘調査として実施した第3次調査の成果は、大きく2点ある。一つは、後方部の規模が一辺15.2mないし15.4mの前方後方墳であると確認できたことである。ただし、第6トレンチで検出したくびれ部と考える地山の加工段は、類例のない特異な構造である。これが真にくびれ部であるかどうか、さらに確かめる必要がある。また、第6トレンチの認識に関わって、前方部前端の位置もさらに北側に存在する可能性がある。第2トレンチの葺石とした石列の評価も含めて、前方部の様相をより詳細に明らかにする必要がある。

二つ目は、1号墳と2号墳の新古関係が明らかになった点である。2号墳が時期的に先行する点は、出土した三角縁神獸鏡の編年に照らしても矛盾しない。地域における古墳の出現過程を考える際に拠るべき重要な事実となろう。さらに、2号墳の墳丘形態の解明も果たすべき課題となる。

調査によって古墳に伴うと考えられる土師器が得られたことも特筆すべき点である。これらの中に時期決定に有効な資料は多くないが、かつて出土した遺物との関連が考えられ、一体的な整理作業が必要なものを含む。具体的な作業は今後委ねざるを得ないが、関係者、機関等の協力を得つつ進めて行きたい。(高田・渡辺・大橋・山田)

註

- 1) 夙々木氏没後、氏が所蔵していた考古資料や調査メモ等が道族によって米子市に寄贈され、現在弊機関である。「菅段寺古墳群」と題されたノートは、氏がおこなった発掘調査の報告書の草稿として書かれたものだが、「第一号墳のMEMO」として2名の中学生のうち1名から聞き取った内容が記されている。
- 2) 山陰考古学研究所作成の測量図は1999年発行の『新修米子市史』第7巻に掲載されるまでは未刊行だった。岡田龍平氏らによる測量図は、弥生時代中期の木棺墓群である宮前道跡の発掘調査報告書(1979年刊)に掲載されたが、押図の余白に解説もなく掲載されたのみで、どこまで認知されていたか不明である。しかし、山陰考古学研究所1978文献では、それ以前の文献と異なって前方後方墳との認識が示されている。
- 3) 遺跡地図の公式な道跡名は寺内古墳群であり、1号墳のみ菅段寺古墳という別称が付される。すでに別称の方が古墳群の総称として一般的に用いられていること、小字名によって道跡名を付す原則に照らしても「菅段寺」が好ましいこと、遺跡地図の古墳番号が発見順に付され、多数の支群にまたがって連番が付されているため、認識に不便なこと等を勘案し、本書では、同一尾根上の7基を菅段寺古墳群と呼ぶ。遺跡地区との対応は、菅段寺1号墳~6号墳までが寺内001号墳~006号墳、7号墳は寺内048号墳である。6号墳は5号墳からさらに数10m南にあり、径16mの円墳とされる。7号墳は規模、墳形ともに不明である。

参考文献

- 梅原末治 1924『因伯二国に於ける古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告第2冊、鳥取県
- 岡田龍平他 1979『宮前道跡発掘調査報告書』見聞教育委員会
- 山陰考古学研究所 1978『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ—東作書1・東郷池周辺』山陰考古学研究所報告第2種口誌康 1953『同型鏡の二子について—鳥取県菅段寺山古墳新出鏡を中心として—』『古代文化』1・2
- 湯村 功他 1996『天宮上井前道跡』鳥取県教育文化財団調査報告書53、鳥取県教育文化財団
- 米子市史編さん協議会 1999『新修米子市史』第7巻 資料編考古・原始・古代・中世、米子市
- 米子市史編さん協議会 1997『新修米子市史』第6巻 自然編、米子市

発掘調査抄録

ふりがな	ふだんじこふんぐん							
番名	普段寺古墳群 I							
産番名	第 1～3 次調査概要報告書							
巻次	I							
シリーズ名	島根大学考古学研究室調査報告							
シリーズ番号	第 10 冊							
編著者名	渡辺貞幸、大橋泰夫、山口康弘、高田健一、宍田武司、田中 大、林田好子、福代幸佑、正木伸男、井田 智							
編集機関	普段寺古墳群調査団（島根大学法文学部考古学研究室・鳥取大学地域学部考古学研究室）							
所在地	〒690-8504 島根県松江市西川津町 1060 番地（島根大学法文学部） 〒680-8551 鳥取県鳥取市湖山町南 4 丁目 101 番地（鳥取大学地域学部）							
発行年月日	2008 年 3 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡					
ふだんじこふんぐん 普段寺古墳群	とっとりけん 鳥 取 県	31389	33	35° 21' 53"	133° 21' 20"	20060818	40 m ²	学術 調査
	さいほくぐん 西 伯 郡					～		
	なんぶちやう 南 部 町					20060901		
	てんまんあざ 天 満 字					20070327		
	しちふだんじやま ト 普 段 寺 山					～ 20070402 20070817 ～ 20070903		
収録遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺 構	おもな遺物	特記事項			
普段寺古墳群	古墳	古墳時代	周溝、青石	土師器	これまでの出土品 三角縁神獣、鉄剣、菅玉 土器粘土、埴輪合子片			

普段寺古墳群 I 第 1～3 次調査概要報告書

島根大学考古学研究室調査報告第 10 冊

編集・発行 普段寺古墳群調査団（島根大学法文学部考古学研究室・鳥取大学地域
学部考古学研究室）

印刷 米子プリント社

FUDANJI TUMULI I



March 2008

Research Project on Fudanji Tumuli

By Departments of Archaeology

Shimane U and Tottori U